

赤べこ発祥の地・福島県柳津町の JR 只見線駅舎の再生 会津柳津駅舎情報発信交流施設



地域に残る記憶の姿に戻した駅舎の外観

※撮影：小川重雄



既存内装の目板と同じ60mm角の木材によるヤグラ
赤べこを乾燥させる工程がヤグラに吊るされ、作業工程が風景の一部になる



待合室。家具に隠されていた受付を復元し観光案内とした



鉄道機能との区分のために既存の下屋を撤去し、庇を新設した



カフェと赤べこ工房を空気に仕切る
下段は赤べこの展示棚になる



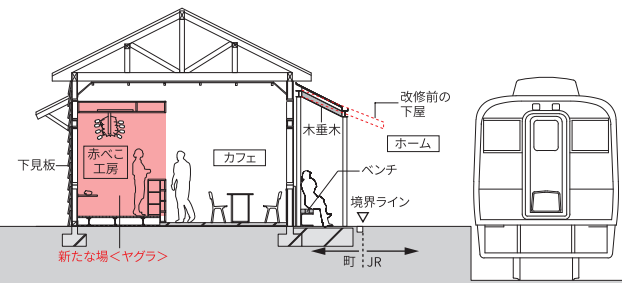
外壁側から改修することで内装を最大限残した目板は一度外して保存し内装工事の後に復旧した

「記憶の継承」と「ヤグラによる新たな場づくり」による駅舎の再生

会津柳津駅舎は、地元の強い願いで昭和2年に建築され、地域の玄関口、物資輸送の根拠地として大いに賑わった。しかし、利用者の減少に伴い無人駅となり、駅利用者が通過するのみとなっていた。本プロジェクトでは、記憶のつまった建物を保存し、若い世代を含む住民と協働して観光と地域交流の拠点を目指した。外観は地域に残る記憶の姿に戻し、内部は既存の内装を生かしながら格子状のヤグラ等を新たに挿入し、駅待合機能に、赤べこ張り子工房・カフェ・観光案内所を加えた。

住民・町・観光協会・JR東日本・建築家が参加する利用検討会議が核となり、「多世代が自分の居場所と感じられる駅舎の復元」と「赤べこの張り子製作を中心とした柳津町の発信拠点」という方針をつくり、デザインに関わりながら議論や社会実験（モダン駅フェス）を行うプロセスを通して、同会議メンバーが運営を担うことにつながった。多様な記憶を紡いできた駅舎は、地域のアイデンティティとなり、地域のお年寄りから若い学生まで滞在し、活動・交流する場となった。

地方鉄道では多くの駅舎が無人化し維持が困難になっている。また、若い世代の地方移住の意向が高まっており、自治体には活躍の場の提供が求められている。今回の改修プロジェクトは無人駅舎活用のモデルケースの一つである。



【所在地】 福島県河沼郡柳津町大字柳津字下大甲 610-7
 【発注者】 柳津町
 【規模】 敷地面積：312.83㎡ 建築面積：199.11㎡ 延床面積：129.19㎡
 【設計監理】 株式会社TIT/富沢真二郎、池田晃一、田中大朗、安部遥香
 【構造設計】 TS構造設計/佐藤岳人
 【電気設備設計】 エレクトリックプラン/星忠光 [機械設備設計] ハツ橋設備/城戸陽一
 【施工】 滝谷建設工業株式会社

地域の担い手が議論や社会実験を通して運営までを担う場をうみだすデザインプロセス

